

ミナカミ・ミライ・マルシェにみる 地域再生の歩み

みなかみ町役場 企画課



ミナカミプラザ完成予想パース

2021年4月、群馬銀行がみなかみ町の豊かな自然資源や首都圏からの好立地に着目し、地方創生に取り組むオープンハウスグループを紹介したことが包括連携協定の端緒となった。初期段階ではスキー場事業の承継や水上温泉街の大型廃業ホテル再生が議題となり、単一施設の再生では十分な効果が得られないとの認識から、東京大学大学院工学系研究科に温泉街全体の空間デザインを依頼。こうした流れを経て、2021年9月に産官学による包括連携協定が締結され、持続的な地域活性化が本格的に始動した。

プロジェクトは当初、廃業ホテルを解体し新施設を建設する計画だったが、建物の一部が河川区域内にあるため再建不可と判明。利根川対岸の景観も魅力的であることから既存建物を活かす「再生建築」へ転換した。同時に、地域の空き家や空き地活用を議論する中で「廃墟再生マルシェ」が企画され、2022年の初回には約1300人が来場。翌年は約3000人、さらに第3回では約4500人と認知度が拡大した。大学依存への懸念から地域主体の運営が模索され、公募型プロポーザルで旧一葉亭の活用方針が決定。プロジェクトは「廃墟再生」から「再生活用」へと進展した。

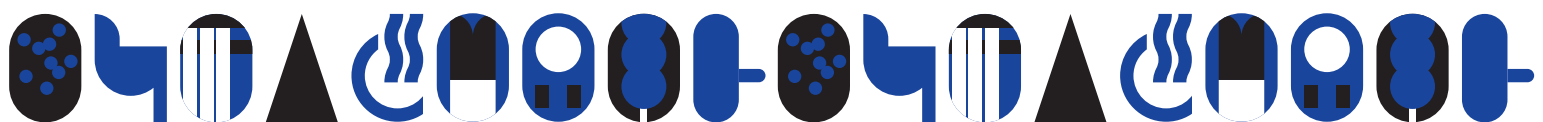
2025年には「ミナカミ・ミライ・マルシェ～水上温泉 廃墟再生ストーリーズ2025～」へ発展。前年の4会場から10会場へ拡大し、JR水上駅から道の駅水紀行館まで南北1.5キロに展開。出店数も過去最大の52店舗となり、地域全体を巻き込むイベントへと成長した。当日は通常非公開の旧一葉亭内部ツアーを実施し、減築工事後

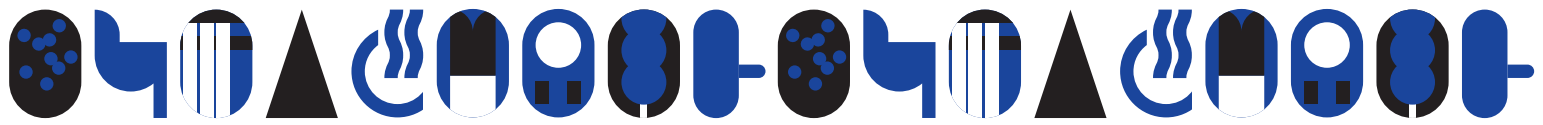


プロジェクトの中心となっている旧一葉亭



「廃墟再生マルシェ」街中の様子





旧一葉亭内部ツアーの様子



電気バス「eCOM10」

の姿を公開。「減築と再生」という新たなアプローチを紹介し、自然との調和を体感してもらった。

また、群馬大学との共同研究で電気バス「eCOM10」を走らせ、二日間で約550名が利用。観光客の回遊性を高め、滞在時間の延長やクラフト体験、地元食材を活かした飲食を楽しむ姿が見られた。

12月9日の報告会では、来場者アンケートを踏まえ「マルシェを継続するには」「11個目の会場を作るなら」「日常的に続ける会場はどこか」といったテーマで議論。出店者や住民からは自然を楽しめる新コンテンツや地域交通整備への期待が寄せられ、時間帯を区切った一方通行や歩行者天国の提案も出された。これらは将来的に「ウォーカブル区域」として温泉街の魅力を高め、「そぞろ歩きを楽しむ温泉街」への方向性を示すものとなった。



「ミナカミ・ミライ・マルシェ〜水上温泉 廃墟再生ストーリーズ2025〜」の様子

——地域資源を活かし、廃墟再生から未来志向のまちづくりへと進むみなかみ町の挑戦は、持続可能な観光と暮らしを結びつける新たなモデルとして注目されている。



湯原橋から望む谷川岳は絶景

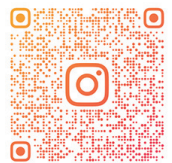
【みなかみ町 廃墟再生プロジェクト】

詳細はこちらから↓

ホームページ



Instagram



@HAISAI_MINAKAMI

